学苑・文化創造学科紀要　第八四一号　三八～四八（二〇一〇・一一）

新しい家族の物語

――野島伸司・テレビドラマ「薔薇のない花屋」――

太田鈴子

1

野島伸司脚本の一九九〇年代に話題となったドラマには、「高校教師」、「人間・失格～たとえばぼくが死んだら」、「未成年」、「聖者の行進」などがあって、社会問題が題材になっているという印象がある。野島ドラマは、社会問題や事件を題材とする刑事物や探偵物以上に深く人間を追究しているが、恋愛や家族を題材にしても、同系統のドラマとは異なるアプローチをしている。本稿ではまず、一連の野島ドラマを概観し、変化を見たうえで、二〇〇八年に放送された「薔薇のない花屋」を詳細に検討したい。

野島伸司は、一九八八年フジテレビ系の連続ドラマ「君が嘘をついた」で脚本家としてデビューし、「一〇一回目のプロポーズ」(注1)で一躍注目された。このドラマは、一九九一年七月から九月にフジテレビの月9ドラマ(注2)として放送された恋愛ドラマである。矢吹薫（配役、浅野温子）と星野達郎（配役、武田鉄矢）とのお見合いから始まるが、達郎は容姿が冴えないだけではなく、仕事も冴えない万年係長で経済力もないという設定。これは、恋愛ドラマとしては異質で、トレンディ・ドラマには登場しないキャラクターである。フジテレビでは同じ年の最初のクール、一月から三月の月9ドラマとして「東京ラブストーリー」(注3)を放送している。トレンディ・ドラマの代表作となったドラマである。医大生、おしゃれなオフィスビルにあるスポーツ用品店に勤める男女、その女は帰国子女、そして女性のなりたい職業の一つ幼稚園の先生など、視聴者が納得するキャラクターの美男美女が登場し、三角関係など恋愛の常道を歩き、結婚と失恋があるというもので、地方から東京に来ての一人暮らし、生活も経済的にも自由で、友人も恋人もいる登場人物に、視聴者は、夢と現実を重ねながら楽しめる。

「一〇一回目のプロポーズ」は、九十九回お見合いに失敗中の冴えない中年男星野達郎を主人公とする。達郎の「ずっと諦めの人生だったんだ。」「自分の夢も薫さんとの結婚も諦めちまったら、残りの人生すべてを諦めたことになる。オレさ、薫さんを好きになっていくうちに、いつのまにか自分のことも少し好きになってたんだよな。」とか、薫の「人間、結局は自分が一番かわいいようなところがあって、いくら好きだって言っても身を切ってまで恋愛には生きられないっていうか」「星野さんみたいな人は初めてですよ。愛してくれる人に精一杯こたえていくっていう、もうひとつの愛の形に気づかなかった」などの人生訓ともいえる名セリフで、人を

真剣に愛することでコンプレックスを乗り越える姿が浮き彫りにされる。薫の気持ちが達郎に寄り添っていく過程に視聴者は引きつけられ、主題歌のチャゲ&飛鳥「ＳＡＹ　ＹＥＳ」もヒットし、恋愛ドラマの代表作となった。ヒットしているドラマの系統に追随しない、外見より心を開いていく、気づきから生まれる教訓を語る主人公というキャラクター設定など、野島独特の方法は、この当時から見られる。(注4)

以後野島はフジテレビと仕事をしていたが、社会問題を扱ったドラマに意欲を示し、ＴＢＳの制作者伊藤一尋にアプローチして金曜一〇時枠(注5)を希望し、一九九三年「高校教師」(注6)を制作した。「高校教師」は、「人間・失格～たとえばぼくが死んだら」(一九九四年)(注7)、「未成年」(一九九五年)(注8)と共に、学校を舞台としたＴＢＳの野島三部作と言われ、さらに「聖者の行進」(一九九八年)(注9)を含めてＴＢＳ野島伸司シリーズと言われる。これまで、視聴者の多いゴールデンタイムのドラマにはなかった、近親相姦、いじめ、障害者などのテーマと、暴力を含むドラマの展開に、視聴者の拒否反応と支持とを併せもつ番組として評判となった。「聖者の行進」(一九九八年)は、実際に水戸市のダンボール加工会社で起こった知的障害を持つ従業員に対する暴行、助成金不正受給を題材とし、暴力描写の多さに視聴者から批判が集まり、スポンサーが降りてしまった作品である。民間放送教育協会企画委員、文化放送番組審議委員を勤め、テレビ番組について発言をしている松尾羊一氏は、「聖者の行進」がドラマとして放映されたことについて

元来、この手のテーマは告発型ドキュメンタリーの領域に限られていた。ドラマで扱っても、善意の健常者にかこまれた少数者へのいたわりという視点でしか語られなかった。ドキュメンタリーの枠から飛び出て、物語世界になじむことが望まれていた。身障者アマチュア劇団の盛況を報道で見るたびにその機運がわかるのだ。／それにしても『聖者の行進』のようなドラマが堂々と市民権を得たこと、これほどの支持があったことを考えざるをえない。新しいドラマ的現実はそこまできているのであろう。

(『テレビドラマを「読む」――映像の中の日本人論』Ｐ117　二〇〇二・一・三一　(株)メトロポリタン)

と、物語世界における想像力で、少数者の実態を明らかにする告発を含むドラマにしようとしていることを評価する。脚本を書いた野島伸司は、「朝日新聞」一九九七年一二月四日夕刊で、このドラマは、これまで同様「現実にいまある社会問題につっこむ」という姿勢に基づき、春ごろ見たニュースがきっかけとなって構想がふくらんだと語っている。事件は会社名から「アカス紙器事件」または会社の所在地から「水戸事件」と呼ばれるもので、知的障害者に対する虐待、暴行について正確に証言出来る被害者が少なく「公判が維持できない」という理由から、社長は詐欺罪および暴行二件・傷害一件のみで起訴され、一九九七年三月二八日懲役三年執行猶予四年の判決を受けた。野島はさらに「いろんな悲劇的な声を聞いて、全部採り入れなくちゃ、と使命感みたいなものが最初あった。でも、その人たちの意見を代弁してドラマをやっても、視聴者には届かない。思い切って、自分の中にストレートに入ってこない感情は放棄しました」と、自身の感性がとらえ得たもので作ったと述べている。現実を物語化する時、脚本でいかにリアリティを出せるかである。ここにあげた四作は、リアリティがある故に、視聴率を下げた時もあった。

野島は、以降「世紀末の詩」（一九九八年、日本テレビ）、「リップスティック」（一九九九年、フジテレビ）、「美しい人」（一九九九年、ＴＢＳ）、「ストロベリー・オンザ・ショートケーキ」（二〇〇一年、ＴＢＳ）、「ゴールデンボウル」（二〇〇二年、日本テレビ）、「高校教師」（二〇〇三年、ＴＢＳ）、「プライド」（二〇〇四年、フジテレビ）、「あいくるしい」（二〇〇五年、ＴＢＳ）と毎年ドラマを書いた。

「プライド」は、演出中江功・澤田鎌作、出演木村拓哉、竹内結子、市川染五郎、坂口憲二他。主題歌はクイーン「ボーン・トゥ・ラブユー」で、アイスホッケーチームを題材にスポーツにかける根性ものにラブストーリーを展開させた。次の、田舎に暮らす七人家族を中心に物語が展開する本格ホームドラマ「あいくるしい」は、演出吉田健、平川雄一朗、那須田淳、出演市原隼人、綾瀬はるか、神木隆之介、原田美枝子、竹中直人、桜井幸子他。主題歌はマイケル・ジャクソン「ベン」であった。この二作、ラブストーリーに強い木村拓哉主演の「プライド」は、好評であったが、「あいくるしい」はふるわなかった。何でも話し合える家族に起こる問題、病を抱えた母の二人の息子への教え、母の死、小学生幌の恋、父の再婚などが、かつての父親中心のホームドラマの亜流とうつったのかもしれない。

三年後のドラマが「薔薇のない花屋」である。恋愛、家族そして児童虐待を題材としている。二〇〇八年一月から三月のクールに放映されたドラマの中で、高視聴率を上げ、野島は返り咲いた。

2

「薔薇のない花屋」は、一月一四日から三月二四日まで、月曜午後九時からフジテレビで放映された、フジの〈月9〉ドラマである。制作は関卓也、稲田秀樹、演出は中江功、葉山浩樹、西坂瑞城で、主題歌は山下達郎「ずっと一緒さ」。出演は、香取慎吾、竹内結子、釈由美子、松田翔太、池内淳子、三浦友和、寺島進、尾藤イサオなど。視聴率は、同時期のドラマ視聴率の中では、大旨ＮＨＫ大河ドラマ「篤姫」に次ぐ二位で、最終回は「篤姫」を抜き一位を占めた。

「薔薇のない花屋」は、社会問題として児童虐待を題材としているが、それは自ずと家族について考える内容を含んでいる。野島は、これまでも家族、親子、きょうだいをドラマの題材に選んでいる。代表的な作品はフジテレビのドラマ史上最高視聴率を記録した「ひとつ屋根の下」（一九九三年四月一二日から六月二八日まで。フジテレビ月曜午後九時。制作大多亮。演出永山耕三・中江功。出演江口洋介、福山雅治、酒井法子、いしだ壱成、山本耕史、山本圭、大杉漣他。主題歌財津和夫「サボテンの花」。）である。両親が亡くなりばらばらになったきょうだい四男二女を、能天気だが明るさや正義感があり、義理人情に厚いあんちゃん（長男）がまとめていく。「薔薇のない花屋」には、このあんちゃんのイメージが汐見英治に、養父母に息子が生まれ疎まれるという四男文也の設定は、神山瞬に反映している。

「薔薇のない花屋」の主なキャストは次のようである。

汐見英治…香取慎吾、白戸美桜…竹内結子、小野優貴…釈由美子、
工藤直哉…松田翔太、安西瑠璃…本仮屋ユイカ、汐見雫…八木優希、
広田省吾…今井悠貴、林久則…小市慢太郎、相馬冬彦…中根徹、
キャンディーちゃん…前田健、平川辰巳…尾藤イサオ、
神山瞬…玉山鉄二、四条健吾…寺島進、菱田桂子…池内淳子、
安西輝夫…三浦友和、安西久美子…仁科亜希子

第一回は、出産の場面、そして英治が赤ちゃんを育てているところが流

れ、小さな花屋を営みながら八歳になる雫と仲良く暮らしているところから始まる。花屋の向かいに喫茶コロンがあり、そこのマスター四条健吾が、花屋を借りる時の保証人を引き受け、常に英治と往来し、気兼ねのない関係を築いており、また、近所には菱田さんという女性が住んでいる。すでに息子二人は独立し、花を育てながら暮らしているが、初めて花屋を開いた英治に、花に関して何かと相談にのっている。英治親子は心の通い合った、何でも話し合える関係である。マスターと菱田さんに支えられ、助けられて、ここまで暮らしてきたという設定である。

やがて菱田さんの家が売却されることとなり、マンションで息子と暮らすことになる。花のない暮らしになることに気落ちをしている菱田さんの気持ちを察して、英治は一緒に暮らすことを菱田さんに勧め、菱田さんは英治の家で共に暮らすこととなる。さらに見ず知らずの工藤直哉が兄貴と慕ってきて、これに加わる。誰とでも共に暮らすことのできる英治は、一緒に暮らせば家族だという考え方を持ち、このドラマの思想の一つとなっているが、あまりに穏やかで誰をも受け入れる英治の存在は、ドラマの前半においてミステリアスである。

医者の社会的地位は高い。ましてこのドラマの医者安西は、自分で病院を持ち院長として多くの医師、看護師を抱え、芸能人、タレントを患者に持つ名の知れた外科医という設定である。医者は、一般的には尊敬され信頼されており、テレビドラマにおいても、アメリカのドラマ「ベン・ケーシー」「ドクター・キルディア」が、一九六二年より放送され、現在では一九九四年から放送され第十五シーズンに入っている「ER緊急救命室」などの放送によって優秀な治療技術を持ち、心も広く豊かで患者の側に立って対応のできる理想的な医師のイメージが作られた。が、一方、「白い巨塔」(注10)以来、自分の出世を中心に生きる医者の世界が描かれ、医者に対する悪のイメージも確立されており、豪華な美しい建築の病院を経営し、大きな屋敷に住む外科医安西の悪は、視聴者に、やはり、そうかと、悪の根拠を説明せずに納得させることができる。安西は個人的な恨みを晴らすため、父の手術の成功を可能にする外科医は安西しかいないことを盾に取り、美桜を手先として、一人の男を罠にかけ、物質的にも精神的にも破滅させようと企むのである。安西の企みが、ドラマをミステリー仕立てにし、その展開が視聴者を引きつける。

冒頭から登場するビデオレター。汐見英治の前に現れた盲目の美人美桜。理由不明のまま英治の家に入ってしまうイケメン男直哉。そして全十一回のドラマも後半を過ぎて登場する外科医神山瞬。英治に店を出す資金を貸したコロンのマスターの素性、そして有能な外科医だった院長の手の震え、これらの人物の正体が次第に、安西の復讐の真相と共に明らかになっていく。その真相とは、ビデオレターを発信する女性が院長の娘瑠璃、母親を失って父親英治と仲良く暮らす雫が瑠璃の娘雫、さらに、雫の父は英治ではなく瞬。安西が娘の死を招いたとして復讐を企んだ相手英治は、娘の恋人ではなく、美桜の父の手術のために、安西がアメリカから招いた瞬であったことが、ビデオレターによって明らかになる。英治の家に入り込んだ直哉は、地方から来ている苦学生だが、東京の華やかさに踊らされ借金を重ねてしまい、暴力団まがいの男たちに追われている。その彼が院長の手先となって英治に近づいているのである。

ビデオレターは、全十一回を通して時折流され、当初英治だけが持ち、雫が「かあちゃんの遺言」として見ている。そのビデオを直哉がDVDにダビングして美桜と安西に渡す。ビデオが見る者に示唆を与える。視聴者

もビデオによって謎解きをさせられる。

たとえば雫は「やさしさは鏡」という次の瑠璃の語りに共鳴する。

人と人って、鏡のようだと思わない？　やさしくしてもらうと、なんだかやさしくしたくなるし、冷たくされたり、悪口言われたりすると、こっちもそうしてやるって嫌な気持ちになっちゃうよね。一生懸命好きになると、一生懸命好きになってもらえたらいいよね。鏡の照り返しのように…。同じ気持ちになれるといいな。（五話）

この語りを聞いた後、雫は、英治が栽培農家からのメール文を「今年のシクラメンはいいできですね」と読みあげ「感謝のことばをもらうと父ちゃんもがんばろーって思う」と言うのを聞いて、「それは鏡だね」「やさしさはやさしさを映す」と、瑠璃のことばを理解し感動している。ビデオレターは、人生訓の役割も持ち、毎回挿入される。

3

ビデオレターは、子どもができたことを知りながらアメリカに留学してしまった神山瞬に宛て、瑠璃が語りかけているもので、撮影者は英治である。ビデオレターに込めた瑠璃のことばは、愛や家族についての主張が語られ、このドラマの核になっている。

どうしても君に家族をつくってあげたいんだ。だって本当の君はやっぱり誰よりも…ひとりぼっちだったから。（一話）

シンデレラとか白雪姫、いろいろあるけど私はやっぱり、美女と野獣のベルに感情移入しちゃうんだ。だって他の王子様はみんな、なんだか、女の子の外見だけに惹かれちゃってるでしょう。いわゆる一目惚れ。でも、魔法をかけられた野獣は…愛を知らない。薔薇の花びらが、枯れて落ちる前にベルが愛することを教えなくちゃいけないの。じゃないと一生魔法はとけない。だから君が、今は愛を知らなくてもいつかきっと、私がベルのように教えてあげたい。薔薇の花びらが、枯れ落ちてしまう前に…。それが私と君のフェアリーテイル、おとぎ話。（三話）

これだけ連絡がなければ、きっと君に捨てられちゃったんだろうなって、感じてはいるの。だけどね、多分、それからが勝負なんだろうなって。私と君との勝負。私がこの子を産んで、それで普通に暮らしているの。君はきっと、私はどうしてるかなって、思い出すこともある。そのとき君が、今度は怖々と、きっと私たちに会いに来る。君は、本当に自分の子か？　って聞くでしょうね。っていうか、絶対聞くのよ。もうその時は勝負ありね。私は勿体つけてこう言うの。君はお医者さんでしょ、ＤＮＡ鑑定してみたら。君は、ハトが豆鉄砲。おいおい、こんなこと言う女だったっけ。バカじゃないって言ったけど、やっぱりバカな私。私の勝ちよ。ううん、私と、この子の勝ち。ウィナー。（十一話・最終回）

英治は安西に、瑠璃のことを「彼女は素敵な女の子でした。あなたが育てたからだと思います。お嬢さんからあなたの話しを聞かされました。あふれるくらいの愛情を私はパパからもらったの。私はだからこれ以上もらえなくても平気なの。十分愛されて育ったから」と瑠璃の愛する心の源が

父親の愛にあったことを、娘が確信していたことを伝える。瞬に送るビデオレターは、愛する自分の気持ちに沿った一方的なものとも言えるが、愛を知らずに育ち愛を信じない者へ、愛を十分受けて育った者しか言えないことばとして用意されたものである。男女の恋愛ではなく、子どもと共に夫婦が親子関係を作りながら生きる家族が、心に愛を育むと信じていることばで、この考え方がドラマの思想となっている。一人で孤独に生きる故に心は冷たさを抱え、愛すること、信じることができないと考え、愛することを知っている者にとって、愛を知らないのは、魔法にかけられているとしか思えず、魔法を解くのは、愛を知っている者だという考え方である。

最終回では、瑠璃の予言を実現したかのように、瞬が雫を学校へ見に来る場面が用意されている。子どもが愛する心をもたらすという提示となっているようである。他にも、美桜と父親との同様の関係が描かれる。

主人公の英治は瑠璃と瞬の友人だとしても、英治が瑠璃の子どもを自分の子どもとして育てる理由が、さらなるこのドラマのミステリーである。このドラマに用意されたいくつものミステリアスな疑問は、視聴者の想像をかきたて、登場人物への感情移入へと誘っている。殊に英治の冷静で、自己理解、他者理解に優れ、かつ「俺はいいんだ」と他者の利益や他者の悩みを優先する聖人のようなキャラクターは、謎めいて見える。結局、英治の素性は、広田省吾という少年によって明らかにされる。このドラマの季節は冬、バレンタインデーを挟み、二月から三月初め、ドラマ放送の期間と重なっている。小学校は学年末を迎えようとしている頃であるが、そのような時に、雫のクラスに転校してきた少年が省吾である。

省吾はいつも学校の帰り、一人で河原にいる。ある日、スーパーで省吾がチョコレートの万引きをして捕まる現場に英治は居合わせる。英治は知り合いの子どもと言ってその場から省吾を救うが、彼は再び万引き事件を同じスーパーで起こす。今回は親の携帯番号をすぐに教え、連絡するとすぐに母親が来て店長にあやまる。そして父親が来て省吾をなぐる。しかし省吾のポケットには何もない。父親は打撲、むち打ち、心の傷などの診断書を沢山持ち込み慰謝料を請求してきた。親の入ってくるタイミングは絶妙で、店長ははめられたと考える。英治は、着ている服がいつも同じであること、食事を与えられない子どもが少しでも長持ちして栄養価の高いものとしてチョコレートを選ぶことなど、いくつかのことが省吾に重なり、親から虐待にあっているのではないかと想像する。英治は「あの子もしかしたら、名もなき戦士かなって」「あの子見てると、なんだか自分の小さいとき思い出すんです」と、英治自身も幼い頃虐待にあっていたことを告白し、省吾から実態を聞こうとする。省吾が一緒に住んでいる男は父親ではなく母親の恋人であること。虐待にあっても自分が悪い子だと我慢してしまうこと。家に帰らず補導され、家に戻るとさらにひどい目にあわされること。母親がその日によっての機嫌が違うのでどきどきする。毎日必死に闘っているが、誰にも気がついてもらえない。三万人くらいいる。実は全国にたくさんいることなど、省吾と虐待の実態を話し合う。省吾は、実母から育児放棄され、実母の恋人から虐待されている。子どもに万引きをさせ、万引きで嫌疑がかけられたことを理由に、慰謝料を請求するが、子どもに満足に食事を与えないという虐待になっている。その手口が露見したところで転居を繰り返しており、学年末もせまった一月末に省吾は転校してきたのである。

『児童虐待の防止等に関する法律』(注11)では、児童虐待を、外傷を生じる暴行を加える「身体的虐待」、わいせつ行為である「性的虐待」、食事を与え

ない、長時間放置するなどの「養育の放棄」、児童に対する暴言や児童を嫌い拒む態度、両親間の暴力など心を傷つける「心理的虐待」の四項目で定義している。このドラマでは、「身体的虐待」、「養育の放棄」、「心理的虐待」が摘用されている。英治の周囲は、省吾の保護について考えるが、英治は、親が子どもを虐待しているかどうか、その犯罪を証明するのは時間がかかり勝手に子どもを保護すると誘拐で訴えられる。親はそれだけ強い庇護者で、軽い怪我では、しつけと言い逃れできる。警察が動くには、大けがをして運ばれた病院の医者からの虐待だとの報告が必要であるため、児童虐待が発覚せず、子どもが死に至ってようやく親が問われる現実を説明している。このドラマでは、母親が男に依存し、自分の子どもに無関心になってしまっているが、同様のケースで、父親の違う四人の子どもを持った母親が、恋人ができ子どもを置き去りにしていなくなってしまうという設定の映画「誰も知らない」は、二〇〇四年カンヌ映画祭で最優秀主演男優賞を獲得し、その他国内外の映画賞も多数獲得した。実子で経済的に自立できない幼児、児童の養育を怠る「養育放棄」が題材となっている。現実にも、二〇一〇年八月、大阪で起きた。幼児二人に食事を与えず、排泄物の世話もせず部屋に置き去りにした母親の逮捕である。母親は、ホストと遊ぶために子どもを閉じこめたと話しているといい、映画より残酷である。母親もまた少女期に「養育の放棄」にあっていたという。虐待の連鎖と言えるが、この事件では、異常を感じた近所の住民が四回通報したが、救済できなかった。二人は、全く何もできない幼児であり、死後ようやく保護された。あらゆる機関に対してその非道さをつきつけたいが、それほど親の子どもに対する権利が守られているということでもある。次いで九月、父親による十二歳の長女虐待が新聞やテレビニュースで報道された。義理の父親から暴行を受けながら、学校の教師などには否定していた長女は、ひそかに日記に暴行の印をつけており、それが暴力の証拠とされるという。

「薔薇のない花屋」で英治は、「子どもが親を売れば助かる」、子どもがSOSを発すれば、親の罪状が決定するまで秘密の施設に保護できるというのであるが、そこまで自立し、自分を自分で救いだそうとする子どもは少ない。先の日記に印をつけていた長女も、親を売ることまでは思いつかなかったのである。このドラマで省吾は、「名もなき戦士」の先輩がいて、自分の味方になってくれる「正義の味方」の存在を得て、SOSを発信し、救済された。英治とマスターが「正義の味方」である。

「名もなき戦士」とは、実の親に虐待されながら声をあげることができない、声をあげてはいけないと思っているために、闘っているのにもかかわらず、事実を誰にも気づいてもらえない子どもたちのことである。このドラマで命名された。「戦士」とは、そうした境遇に追い込まれた子どもに立ち上がってほしいという願いをこめたものであり、また漫画やテレビアニメで人気の高い少年少女戦士もののイメージも含まれているだろう。宇宙や地球を転戦しながら悩み傷つき成長していく少年少女が活躍する「機動戦士ガンダム」、普通の中学生が愛と正義のセーラームーンに変身し街を襲う妖魔を倒し街を守る「美少女戦士セーラームーン」などが、その代表的なものと言えるだろう。虐待の中から立ち上がり自立して闘う少年少女に勇気を与えたいという意図のみえる呼び名である。

虐待から逃げ出し、保護され、家族を知らずに育ち、成人した者は、どのような人間となっているのか。野島伸司の想像は、表裏と言える二人の人物を描き出した。英治と瞬である。

英治は、「俺はいいんだ」と人の幸せを眺める位置を常に選び、他者と一定の距離を保っている。瞬は、自分が人から一目置かれる位置を望み、他者と常にぶつかりながら上を目ざし続ける。英治は人にやさしく、他者のすべてを受け入れ、憎まない、恨まない、攻撃しない、人を信じ、愛することのできる聖人のような人間に成長している。瞬は、誰も受け入れず、誰も信じず、愛さない、愛されることも拒む。「信じるのは俺たちだけ」と英治だけを信じているというが、英治との関係でも責任が問われそうになれば、英治を非難し攻撃する。英治の頼み事にも苛酷な交換条件を出して、頼まれた事を実行する負担感以上の苦痛を与えなければ気がすまない。必ず代償を求めるのである。まるで修羅である。聖人と修羅を描いたのである。この表裏ほどの違いは、生来のものなのか、育った環境からくるものなのか。二人が関わった少年時代のエピソードが一つ紹介されている。

中学の時、都内にパン屋のチェーン店をいくつも持つ裕福な里親が現れ、瞬は真っ先に出迎え挨拶をし、まとわりつくように里親に気に入られるよう努力した。しかし英治が選ばれた。瞬は里子を譲ってくれるように英治に頼み込み、英治は里親の前で暴れてみせることで候補からはずれ、瞬が選ばれたというものである。里子になってからも瞬はよく勉強して里親に大事にされるよう努力した。しかし、里親に子どもが生まれると、学費や留学費用など出してくれ経済的には不自由することはなかったが、瞬もまた邪険にされたのである。そのような境遇を体験し、瞬は英治だけは信用するようになった。英治が里子候補からあっさり降りてしまったのは、里親から選ばれただけで「いっぱいになってしまった」からだと言っている。それは与えられることをすっかり諦めたものの思いであろう。十代前半ですでに、生きられるだけで十分だと英治は悟ってしまっていたのである。

瞬はアメリカに留学し、アメリカで優れた手術の技術を身につけた外科医となり、誰にもできない困難な手術を手がけ、それ故に日本へ招かれるほどに出世し、欲しいものを何でも手に入れることのできる財産を築きつつある。

一方保護施設で育っただろう英治は、おそらく留学前の瞬を介して瑠璃に出逢った。瑠璃の愛は瞬に向いていたが、瑠璃がこの世を去る直前からビデオレターの撮影をしながら瑠璃を見つめ、瑠璃のことばを聞いた。誕生した雫を育てながら八年間、瑠璃の残したビデオレターを見ながら、瑠璃の笑顔と愛について語ることばを頼りに生きてきたのである。瑠璃の父安西に「彼女は素敵な女の子でした」と素直に語ったことばには、瑠璃への愛がこめられている。英治は八年間ビデオを繰り返し見続けたことにより、家族がなければひとりぼっちであり、家族が愛を教えてくれるのだという瑠璃の主張を繰り返し聞いた。それは英治がどんな人をも許し、信じることを支える力となっていたであろう。雫は瑠璃の子どもであり、英治は父親として、また瑠璃の代わりに母親として雫を育て、どんな人とでも一緒に暮らせば家族だという考え方を持つにいたった。幼い時から「自分はいいんだ」と己れを返上しなければ生きていられなかった。求めても得られなかったから、自分が受け入れることで、孤独から救われてきたのでもあろう。瑠璃のビデオレターは、溢れる愛情を受けて育った者から愛についての実感が語られ人を癒すものとして設定されている。英治の人を受け入れ信じる気持ちが、菱田さんを癒し、マスターを癒し、安西を癒し、両親が離婚し愛を知らなかった美桜に愛の気持ちを育てる。さらに最終回には、瞬にもおよぶという展開は、新しい家族の形を示している。

瞬は、英治とは逆に、求めて、求めて、求めていく。孤独の中で自分に

付加価値をつけ、それを武器に前進しながら、欲しいものを獲得するために闘う。しかし手に入れても、手に入れても瞬は満たされることはないだろうと英治は推測し、年をとって孤独になった時、英治を頼る契機となるように、あえて瞬から多額の借金をする。表裏の関係だが、二人とも少年時代の境遇に負けることなく生き抜く強さに共通点がある。

英治と瞬は、省吾の将来の姿だろうか。このドラマは、家族の愛が、両親の愛が、他者を信じ、他者に対して優しく許す心を育てると語っている。英治は花屋を営んでいるが、マスターが花一本、コーヒー一杯売れても十円の利益にしかならないというように貧しく、衣服も部屋も家具も贅沢なものは何もなく、社会的地位もない。虐待から立ち上がった主人公が、傷心・孤独から人を救済するときに拠り所とするのは財産・社会的地位ではなく家族の愛である。家族は血縁者で構成されるとは限らないというドラマの主題を体現する人物として主人公は設定されている。ドラマは、安西におどされながら英治をだました美桜を英治は許し、迎えに行き、結婚へゴールインするラブストーリーへと展開し、ハッピーエンドとなる。ミステリーであり、ホームドラマであり、社会問題をふくみながら、聖人故に幸福をつかんだドラマとして幕をおろす。

このドラマは、結局英治という一人の聖人の物語である。児童虐待を受けても、英治のように聖人になれば幸せがつかめるのだろうか。ドラマは親の心理や境遇に踏み込み、原因を考えるなど親の問題には深く入っていかない。省吾の服装は清潔感があり、顔もきれいで、そのようなことが起こっているという説明だけがある。省吾救出の場面もぼかしをかけたスローモーションで描かれ、争ったり、暴力的な絵は回避されているため、視聴者に現実感は乏しく、省吾の苦悩は伝わらない。救出されてよかったという気持ちだけにとどまり、問題意識は起こらない。

児童虐待を受けた子どもが将来幸せになれるかどうかが、偶然の出会いや機会といった個人的な運や特殊な能力にゆだねられてしまっている。娯楽の要素の強いドラマであってノンフィクションのドキュメンタリー番組ではないのだから、虐待児童が聖人化するという設定に無理がある訳ではないが、登場人物すべてが、英治によって愛を知る人になり、結婚＝幸福というステレオタイプは、ロマンティックな幻想を追うに終始するように思える。社会問題などない、どんな人のことも信じれば必ず幸せへと導かれるというような、夢の実現を約束するかのようなドラマからは、複雑な問題を単純に善悪、正誤で図式化する安易さが透けて見える。虐待の原因を取り除き、どの子どもも同様に幸福になれる社会構造の提案とまでいかなくとも、視聴者の問題意識を導き出す展開を望みたい。

4

「薔薇のない花屋」は、薔薇を置かない花屋である。薔薇にはとげがあり、体中にとげを持って周囲と戦う親から見放された子どもたちを思い、英治は薔薇を置かないという。自立し、どんなときでも、人の幸福を第一に願うことができるまでに精神を鍛えた英治のような人物がいて、はじめて血縁の結びつきのない者が集まって家族となることができる。このドラマには、甘えた人間は、ほとんど描かれなかった。いずれも、人に関わり、人に頼らず、自分の意志と責任で歩く自立した人物である。八歳の雫でさえも、英治をなぐさめることができるのである。どのような境遇にあっても、人に甘えず、人と関わりながら、人の心を察し、倒れそうな人を助け、誤解とわかればすぐ改める人物ばかりである。舞台は、小さな木造の家が

建ち並ぶ、昭和三〇年代の東京のような町の一角である。隣人とすぐ話しのできる、コンクリートが遮らない所。この舞台設定も思いやりのある共同体的居住空間として必要な環境なのであろう。

保護施設から英治を頼ってきた省吾を加え、英治と美桜と三人の新たな家族生活が始まるところで、このドラマは終わる。

英治と美桜の結びつきは、雫にクラスのどの母親より美桜が綺麗と言わせ、美人だから英治が引かれたというように描く。美桜は料理は上手だが、自己中心的で、人の気持ちを幼い頃から試していたと美桜の父親が話すようにわがままな女性である。人を愛したり、人に愛を知ってもらいたいと願う瑠璃と表裏である。美桜は英治から家族によって愛が育つことを教えられた。英治が美桜と恋愛の末ハッピーエンドを迎える結末には、どうしてもラブ・ストーリーにしなければならないというドラマに課せられた縛りが見えるようである。美桜と英治は、本当に結婚するべきだったのだろうかという疑問が残る。二人の気持ちが自然に寄り添うような場面が描かれていなかったからである。美桜が英治と暮らすために、菱田さんが、美桜の父親と暮らすというのも、ご都合主義の結末である。英治の理想の女性は、あくまでビデオレターの瑠璃のように思える。

英治は瑠璃との出会いによって支えられることを体験し、ある意味での聖化を遂げたのであろう。しかし、生まれながらの聖人はいない。人は人と出会い、支えられ、支えることの大切さを知るという流れに、このドラマのリアリティを求めたい。〈一緒に暮らせば家族だ〉という英治の信念を貫く仕立て。安西・雫・菱田さん、そして省吾が新しい家族として繋がることで拡大した〈家族〉も、やがて再び小家族に分割されて終局を迎える。そこにも、視聴率に依存したテレビドラマの限界が見える。

（注1）　101回目のプロポーズ：放送一九九一年七月一日～九月一六日。制作大多亮。演出光野道夫・石坂理江子。出演浅野温子、武田鉄矢、江口洋介、田中律子、石田ゆり子、竹内力、浅田美代子

（注2）　フジ〈月9〉ドラマ：月曜二一時から二一時五四分にフジテレビで放送されている連続テレビドラマの通称で、フジテレビのドラマの看板枠である。一九八七年四月から放送された「アナウンサーぷっつん物語」以降、視聴者の内若年層をターゲットとして、都会で一人暮らすおしゃれな若者のラブストーリーを題材にした〈トレンディードラマ〉ブームを起こした。特に一九九一年一月から放送された「東京ラブストーリー」は最終回視聴率32.3％を記録し、「101回目のプロポーズ」「ひとつ屋根の下」「あすなろ白書」「ロングバケーション」「ラブジェネレーション」などの高視聴率のドラマが続き、〈月9〉ドラマの地位を確立し、〈月9〉ドラマの主題歌も必ずヒット曲となった。〈月9〉への視聴者の期待は大きい。

（注3）　東京ラブストーリー：放送一九九一年一月七日～三月一八日。原作柴門ふみ。脚本坂元裕二。演出長山耕三・本間欧彦。出演鈴木保奈美、織田裕二、有森也実、江口洋介、千堂あきほ、西岡徳馬。主題歌小田和正「ラブ・ストーリーは突然に」

（注4）　阿部嘉昭は『野島伸司というメディア』（P52～69　一九九六・七　図書新聞）において、星野は「ダサさ」にとらわれている。薫は交通事故で亡くした婚約者を忘れられずにいる。いずれもナルシス（自己愛）である。星野は、相手にふさわしくなるよう変わっていき、その変わった星野に薫の気持ちも向かっていく。それは模像の増殖であり、単に「TV」そのものだ。「TVを見ることで視聴者の「ナルシス」は際限なく強化されてゆく。『101回目のプロポーズ』のもつ主題「ナルシス」も、その状態を正確に他律的に生きたにすぎない。だからそれは野島が書いた個性的なドラマではなく、単に「TV」なのだ。」と言う。阿部の指摘通り、現実を生きていない自己幻想にとらわれる登場人物を作り出すのが「TVドラマ」であるなら、作る方にも、見る方にも、問題意識は生まれないであろう。

「TVドラマ」の問題を明らかにしていくなら、何をテーマとし、何を題材としているのか、どのような演出がなされているかを分析し、ドラマを閉じた円環構造にしている原因を求めていかなければ、「TV」は視聴者を閉じた世界に満足させる方向へと向かわせるための装置にすぎなくなる。それは、「TV」を出口のない場所へと追い込むことになるであろう。

（注5）　TBS系列毎週金曜午後一〇時枠ドラマ：通称〈金ドラ〉。一九七二年からTBS系列で放送されている。TBSでは、日曜午後九時から放送している〈日曜劇場〉と並ぶ息の長いドラマ枠である。最近二〇年間、この枠での高視聴率のドラマには、「協奏曲」（一九九六）、「誰にも言えない」（一九九三）、「高校教師」（一九九三）、「花より男子2」（二〇〇七）、「愛していると言ってくれ」（一九九五）、「聖者の行進」（一九九八）、「未成年」（一九九五）、「ずっとあなたが好きだった」（一九九二）、「花より男子」（二〇〇五）、「人間・失格〜たとえばぼくが死んだら」（一九九四）がある。『野島伸司シリーズ』四作がすべて入っている。

（注6）「高校教師」（一九九三年一月八日から三月一九日まで。金曜午後一〇時から。制作伊藤一尋。演出鴨下信一、吉田健。出演真田広之、桜井幸子、峰岸徹他。主題歌森田童子「ぼくたちの失敗」）

（注7）「人間・失格〜たとえばぼくが死んだら」（一九九四年七月八日から九月二三日まで。金曜午後一〇時から。制作伊藤一尋。演出吉田健、吉田秋生、金子与志一。出演赤井英和、桜井幸子、横山めぐみ、堂本剛、堂本光一他。主題歌サイモン&ガーファンクル「冬の散歩道」）

（注8）「未成年」（一九九五年一〇月一三日から一二月二二日まで。金曜午後一〇時から。制作伊藤一尋。演出吉田健、金子与志一、加藤浩丈。出演いしだ壱成、香取慎吾、反町隆史、河相我聞、桜井幸子、寺田農、西岡徳馬他。主題歌カーペンターズ「トップ・オブ・ザワールド」。）

（注9）「聖者の行進」（一九九八年一月九日から三月二七日まで。金曜午後一〇時から。制作伊藤一尋。演出吉田健、松原浩、那須田淳。出演いしだ壱成、酒井法子、広末涼子、段田安則、いかりや長介。主題歌中島みゆき「糸」「命の別名」）

（注10）「白い巨塔」のテレビドラマは、次の五回制作された。一九六七年NET、一九七八年フジ、一九九〇年テレビ朝日、二〇〇三年フジ、二〇〇七年韓国NBC。

（注11）　児童虐待の防止等に関する法律（平成十二年五月二十四日法律第八十二号　最終改正：平成二〇年一二月三日法律第八五号）。第二条（児童虐待の定義）は次のように定義している。「児童とは十八歳に満たない者」とし、「児童虐待」とは、保護者（親権を行う者、未成年後見人その他の者で、児童を現に監護するものをいう。）がその監護する児童について行う次に掲げる行為をいう。

一　児童の身体に外傷が生じ、又は生じるおそれのある暴行を加えること。

二　児童にわいせつな行為をすること又は児童をしてわいせつな行為をさせること。

三　児童の心身の正常な発達を妨げるような著しい減食又は長時間の放置、保護者以外の同居人による前二号又は次号に掲げる行為と同様の行為の放置その他の保護者としての監護を著しく怠ること。

四　児童に対する著しい暴言又は著しく拒絶的な対応、児童が同居する家庭における配偶者に対する暴力（配偶者（婚姻の届出をしていないが、事実上婚姻関係と同様の事情にある者を含む。）の身体に対する不法な攻撃であって生命又は身体に危害を及ぼすもの及びこれに準ずる心身に有害な影響を及ぼす言動をいう。）その他の児童に著しい心理的外傷を与える言動を行うこと。

○本稿中のドラマからの引用は筆者によるDVDからの書き起こしである。

（おおた　れいこ　　日本語日本文学科）